1. 農民の子どもだったって、本当？

おそらく本当です。当時、自分がどこまで出世できるかは、生まれた家によってほぼ決まっていました。ところが秀吉は、そのルールを乗りこえ、天下人になったのです。

もちろん、それがすんなり受け入れられたわけではありません。秀吉は外国に送った手紙の中で、「自分が生まれた時に母は、体の中に太陽が入ってくる夢を見た。その夜は部屋が日光で昼間のように輝いた」と述べています。「自分は日輪（太陽）の子だから、天下人になれるのだ」と、苦しい説明をしています。

2. 秀吉の兜には、なぜクジャクの羽のようなかざりが付いているの？

合戦の時に、目立つためです。これをかぶれば、総大将の秀吉がどこにいるか、遠くからでもわかります。

戦いが始まってしばらくすると、家来たちから連絡や相談をことづけられた使者が、次々と秀吉の本陣へやって来ます。使者たちは本陣の中を見まわして、最も偉そうな姿をしている人が総大将だと判断し、連絡や相談を伝えました。だから秀吉は、だれよりも偉そうな姿をして、目立っておく必要があったのです。

馬藺後立兜（ばりんうしろだてかぶと）

3. 世界征服をするつもりだったの？

アジア征服は考えていたようです。秀吉は明（中国）、インド、フィリピンなどに、日本に従うよう求める手紙を送っています。朝鮮には、明を攻めるための日本軍を通すように求めました。これを拒否されたため、天正20年（1592）から二度にわたって朝鮮に出兵しました。戦いは、慶長3年（1598）に、秀吉が死去するまで続きました。

4. なぜ家康に天下をとられてしまったの？

秀吉の死後、リーダーがいなくなってしまったためです。朝鮮出兵の失敗から立ち直れないまま、石田三成や加藤清正など、家臣同士の対立が深まり、豊臣政権は混乱します。徳川家康は、この対立を利用しました。自分が豊臣政権の中心になりつつ、最後まで敵対した三成らを、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで倒しました。

この時、家康は59歳。秀吉の子の秀頼はまだ8歳で、家康に対抗する力はありませんでした。

徳川家康（1542～1616）

豊臣秀頼（1593～1615）

名古屋市秀吉清正記念館

〒453-0053　名古屋市中村区中村町茶ノ木 25

TEL (052)411-0035　FAX (052)411-9987

ようこそ常設展へ！

豊臣秀吉 編

名古屋市秀吉清正記念館

秀吉の得意戦法①　兵糧攻め

『豊臣勲功記』　高松城水攻之図より
備中高松城の水攻めを指揮する秀吉（右）、清正（左）。

天正6年（1578）から天正10年にかけて、秀吉は織田信長の命令により、中国地方の戦国大名、毛利氏と何度も戦った。このころの秀吉が得意とした戦法が、「兵糧攻め」だった。大軍で敵の城を取りかこみ、食糧や武器が運びこめないように閉じ込める戦法である。何か月も城を囲み続けるうち、敵は食糧がなくなり、戦う気力もなくしていった。

秀吉は三木城（現・兵庫県三木市）、鳥取城、備中高松城（現・岡山市）などで、兵糧攻めに成功している。時間はかかるが、味方の損害はほとんどない。秀吉の相手となった武将たちは、戦う前に、空腹にたえられなくなり降伏していったのである。

秀吉の得意戦法②　大返し

秀吉は、天正10年（1582）の「山崎の戦い」で明智光秀に勝ち、引き続き天正11年の「賤ヶ岳の戦い」では柴田勝家に勝利した。秀吉がここで見せた戦法が「大返し」だった。

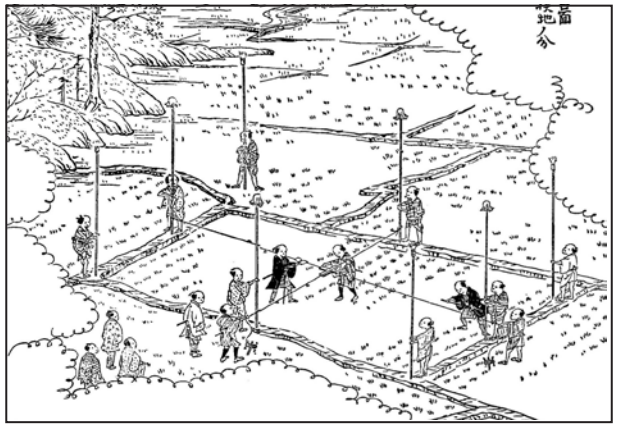
「秀吉勢はまだ遠くにいる」と油断させておき、通常よりはるかに早く大軍で移動し、敵の目の前に現れた。光秀も勝家も、秀吉勢が突然近づいてきたことに驚き、あわてて戦いの準備にかかったが、すでに手遅れだった。

「賤ヶ岳の戦い」では、秀吉は大垣（現・岐阜県大垣市）から木之本（現・滋賀県長浜市）まで、52㎞の道のりをわずか5時間で移動している。

この時秀吉は、途中の街道ぞいに住む農民に、通常の10倍の値段で買い取ることを約束してにぎりめしを大量につくらせた。また多くのたいまつをつくらせ、軍の行く道を照らせさせた。秀吉勢が驚異的なスピードで移動できたのは、食糧と夜でも明るい道路を確保していたためであった。

天正 11 年 (1583) 6 月 20 日の「賤ヶ岳の大返し」

秀吉の政策 ― 検地と刀狩



『徳川幕府県治要略』より「検地之図」（明治期の絵）
秀吉が行った太閤検地は、土地所有者の自己申告ではなく、役人が実際に立ち会って、田の面積を測った。

秀吉は、ほぼ全国で検地と刀狩を行った。

検地とは、田畑を測量して面積と等級（質）を明らかにし、その土地の石高（米などの作物がどれだけ収穫できるか）を決めた。それをもとに年貢を納めさせることにしたのである。

秀吉より前は、長さの単位は地方によりばらばらであった。そこで秀吉は、近畿地方で使われていた1尺（約30.3㎝）を全国共通の単位と決めた。その上で検地を行い、日本中のどこでも正確に面積を測れるようにした。

刀狩は、農民が武器を所有することを禁止するものであった。戦国時代の農民は、自衛のために刀や槍を持っていたが、「それらを溶かして京都の東山に建てる大仏殿の釘にする」ことを名目に、取りあげた。武器を失った農民は、組織だった反乱（一揆）を起こすことが難しくなった。また武士と農民との区別が、ここで初めてはっきりしたのである。